

壊して分かる自然の大切さ 海浜美化フォーラム2009

古きを学び、自然をまねる環境整備を



中村太士 北海道大学大学院農学研究院教授

昨年7月に開かれた北海道洞爺湖サミット（主要国首脳会談）で盛り上がった環境への関心。地球温暖化防止のための二酸化炭素の排出量抑制など環境問題は依然として大きなテーマとなっている。そうした中で、NPO法人北海道海浜美化を進める会（事務局・札幌市）は2月下旬に、フォーラムを開催した。森と川と海のつながりを見つめながら、自然の生態系の仕組みについて学んだ。

「昨年はサミットで北海道は環境問題に高い関心をもって取り組みました。しかし、その後は道民の熱も少し下がったような気がします。私たちは、以前と同じように海浜美化活動をしながらか環境問題に目を向けていきます」2月22日、札幌市内で開かれた「海浜フォーラム2009」でNPO法人北海道海浜美化を進める会の水崎呈会長は、地道に美化活動に取り組む姿勢をこう語って表現した。

四方を海に囲まれた北海道の海岸には様々なゴミや漂着物が流れ着く。とくに最近、隣国からの薬品入りのポリタンクが各地の浜辺に打ち寄せられるなど社会的な問題となっている。

同会では、2001年から毎年定期的に3～4回の割合で札幌市民が地方の海岸に出向き、地域住民とともに清掃活動を展開。ただ、冬場は海岸に雪が積もることから、清掃活動を断念し、海を取り巻く環境問題について議論するフォーラムを開催する。

7回目となった今年のフォーラムのテーマは、「自然の生態系を考える～森と川と海を結ぶ～」。森林管理や河川流域環境が専門の中村太士・北海道大学大学院農学研究院教授が、森と海を結ぶ川の効用と重要性を訴えた。

「北海道は農地開拓などの点から蛇行する河川をまっすぐにしていった。しかし、その弊害がいたるところで現れ、最近ではまっすぐになった河川を昔の状態に戻そうとしている」（中村教授）と語る。





今でこそ、森が豊かなところは水が豊富で、水産物も豊富に取れることはよく知られているが、高度成長時代には自然を破壊してでも農地を増やし、工場を誘致していた。しかし、それによって洪水が頻繁に起こる、また泥が海に流出して魚介類が死滅するなど人為的災害も増加した。

中村教授は、倒木のある河川や手が加わらない自然の河川の持つ効用について次のように語る。「人為的にショートカットされた河川では、水生昆虫や魚は極端に少ないが、昔からある手つかずの河川では生態系が非常によく守られている。倒木の木の下には水生昆虫が多く、当然魚も多い」というのだ。河川に横たわる倒木は魚にとって良い棲みかになるばかりでなく、落葉を留め、腐乱することで魚や水生昆虫の餌になる。また、水かさが増してもそれが自然のダムとしての効果を発揮する。

高度経済成長時代は自然を壊してでも、経済発展を優先させた。「ある面それは仕方なかったかもしれないが、元の状態に戻すには、壊す以上のコストと労力があることを道民は知った」（同教授）という。

同フォーラムでは、中村教授の講演後に札幌学院大学人文学部の奥谷浩一教授がコーディネーターとなってトークセッションの場を作った。会場からは、湿原の効用と減少についての疑問や江戸時代に培われた環境への考え方を学ぶなど活発な意見が出る。「日本人は昔から自然を崇拜していたが、そうした日本人が昔もっていた精神が環境保全の基礎になりうるのではないか」というわけだ。

同会では2009年度も「北海道の浜辺を日本一きれいに」をスローガンに、他のボランティア団体や地域住民と連携をとりながら札幌近郊の海浜美化活動を展開していく。

